

「シン・想定外」対ニッポン

神藤 浩明

「天災は忘れたころにやって来る」—1923年の関東大震災を契機に寺田寅彦が世に問うたといわれる警句【由来は「津波と人間（1933）」「天災と国防 1934」】は、「天災はいつか必ずやって来る」という覚悟に変わる。いかに人間社会が都合の悪い真実から目を背けようとも、自然の猛威は容赦なく襲いかかることを再認識させられた2016年。2度にわたり震度7の激震が襲った4月の熊本地震、地下に隠れた断層が震度6弱を引き起こした10月の鳥取県中部地震、東日本大震災以降で最大の津波を観測した11月の福島県沖地震をはじめ、震度5弱以上の地震発生件数は全国で30回超と2012年以降最多記録をつけた。

もちろん、こうした自然災害に遭遇するたびに叡智を結集した各種の防災対策がとられてはいる。しかし、気がかりなのは以下の3点だ。第一に、人命にかかわる喫緊のテーマであるにも関わらず、専門家と国民の間に断層があり、情報が国民に正確に伝わっていないこと。典型例は地震動予測地図の今後30年以内の発生確率の受け止め方に現れた。例えば、降水確率と違い「ほぼ0~0.9%」がなぜ「やや高い」と判断されるのか。低リスクで安心と誤解した国民は多い。政府は発生確率を数値+4段階リスク表示に変えたが、それで効果があるのか疑問は残る。第二に、国民も防災情報を自分のこととして真剣に受け止めないきらいがあること。災害心理学でいう現状否認の「正常性バイアス」、自分だけは危険な目に合わないと思ひこむ「レイク・ウォビゴン効果」である。本来ならば防災行動につながるべき地震動予測地図が単に恐怖心を煽るだけという研究成果にも頷ける。第三に、膨大なデータが蓄積されればされるほど明らかになる自然現象の複雑さが「想定外」の連鎖を招き、エキスパート・エラーから逃れられないこと。本震か前震かはその時点ではわからない、余震発生確率が計算できなくなる（現在は倍率表示へ変更）、新耐震基準の建物も2回連続の激震で倒壊するなど、新たな「想定外」は尽きない。未知の活断層の発見もそうだが、これでは「日本中どこにいても同じ」という諦めにつながるのも当然だろう。

昨夏の映画『シン・ゴジラ』は、大震災と原発事故、その緊急事態に迷走した政府の対応ぶりを彷彿とさせ、異例のロングラン上映となった。ゴジラは作品の中で「想定外」の化身として描かれた。他方、1954年第1作の『ゴジラ』では、生々しい敗戦の記憶と水爆実験による第五福竜丸被爆事件を背景に、初代ゴジラは「核の恐怖」の申し子、一歩間違えばこうした悲劇が現に生じうる「想定内」の象徴として登場した。本来ならば今回のゴジラも「想定内」の存在であるべきではないのか。今こそ真に求められるべきは「想定外」を「想定内」へ変える想像力だ。2001年9月11日に勃発した米国の同時多発テロ事件では、世界貿易センタービルから2,687名の人命が救われた。生死を分けたポイントは、1993年の当該ビルの爆破事件以後、元兵士の警備主任が、次のテロの可能性を「想定内」に据えて、8年間も執拗に避難訓練を続けたことであった【Amanda Ripley (2008)“The Unthinkable”, 岡真知子訳 (2009)「生き残る判断 生き残れない行動」】。

正確かつ迅速な防災情報発信への努力と並行して、地域での実践的な防災・減災の啓発と教育の徹底は今後益々重要性を増す。未曾有の危機に備えて、予知・予測の限界をわきまえた上で、人命にかかわる「想定外」とは何で、「想定内」に変わりうるものはないかを常に想像する。そして自らの命を守るため主体的に行動に移す余裕を日常生活に意識して組み込む。思いのほかハードルは高そうだが、「想定外」との共存が続くと予想される未来にあっても「この国は、まだまだやれる」と信じたい。